

金欄及び糸錦の成立に関する試論

一附馬贈衛国王墓出土の金糸入り錦を手掛かりに一

関西学院大学
福本有寿子

中国内モンゴル自治区赤峰市に所在する附馬贈衛国王墓（以下「附馬墓」と略す）は、1954年に発掘が行われた遼代の貴族夫婦の墳墓であり、墓誌銘により応暦9年（959）の造営と判明する貴重な遺跡である。この墓の出土品には複数の染織品の断片が含まれており、現在は内モンゴル博物院（内モンゴル自治区フフホト市）に保管されている。発表者は2016年夏にそれらの調査を行う機会を得た。実見したところ、劣化した複数種の断片が入り混じり、当初の姿を想像することは難しいが、他に類のない稀少な染織品が含まれていた。本発表では特に錦地に金糸が織り込まれた織物を取り上げ、金欄の誕生と錦の織成技法の展開について考察する。

附馬墓出土の金糸入り織物断片には2種類が見られ、ひとつは綾織に金糸を織り込んだいわゆる金欄に分類されるもの、もうひとつは錦地に金糸を織り込んだものである。この2種の織物の金糸は、地組織と関係なく、文様をあらわすためだけに織り込まれている。同様の織物としては、12世紀以降「納失失」などと呼ばれアジアに広まった金欄が知られているが、それ以前の作例は報告事例が極めて少なく、これまで金欄成立の経緯は明らかでなかった。金糸を用いた加飾は古くから行われていたが、金糸は織物用の絹糸と比較すると太く硬質で、絹糸と併用して織り込むのが難しいため、手間はかかるが刺繍や綴織に用いられることが主であった。いっぽう錦においては、9世紀末以降ごく僅かながら色系とともに金糸を織り込む作例が見られるようになる。10世紀半ばの遺品である附馬墓出土の金糸入り織物断片はその数少ない作例であり、とりわけ錦地のものは地組織に9世紀から12世紀に隆盛した「遼式緯錦」の技法が用いられた特異な例である。この金入り錦の存在は、より多彩な染織品を求めるなかで錦などの織物に金の輝きを加えるようになり、これが金欄を誕生させるもとになったことを物語る。古代の錦は「遼式緯錦」を以て技術の最盛期を迎え、その後衰退してゆく。12～13世紀になると入れ替わるようにして「糸錦」と呼ばれる織り方を簡略化した錦が出現するが、その背景には金糸と色系をより簡単に織り込もうとする意図がうかがえる。実際に、近年平等院鳳凰堂の阿弥陀如来座像の台座から発見された11世紀の作例と考えられる織物断片や、修善寺の承元4年（1210）の銘を持つ大日如来像内から発見された袋の裂には糸錦に金糸が織り込まれており、このことから金糸の使用が糸錦および金欄の興隆に深く関わっていると考えられる。その後、金糸だけで文様をあらわす金欄が誕生し、日本へもたらされて袈裟や表装裂に愛用され、いっぽう糸錦は唐織物へと展開し、日本の公家装束や能装束にも大きな影響を与えた。

本発表では、金欄や糸錦の源流となる、その初発的な織物として附馬墓出土の金糸入り錦を位置づけたい。